

第2章 幕末までの当別

第1節 和人の記録に見るイシカリ

はじめに～アイヌと和人の交易

本章では、史料に現れた現在の当別町付近と思われるエリアを中心として、近世の石狩川下流域を中心に記述する。引用史料については現代語訳した。

石狩川流域に関して、松前藩の勢力が及ぶ以前、すなわちシャクシャインの戦い^{*1}（1669年）以前の事情は、次のようなものであったと考えられる。

室町時代には津軽半島の北西側に位置する十三湊（現・青森県市浦村）が「夷船」（アイヌの船）でにぎわっていたと記録にあり、このころから石狩川流域に居住するアイヌも本州へ交易に出向いていた可能性は高い。また、シャクシャインの戦い後に西蝦夷地を訪れた弘前藩士らは、イシカリの大首長ハウカセの「我々の先祖は、高岡へ渡って商いをしてきた。松前殿のやり方がただ今の様子では、隠れ忍んででも高岡へ渡り、うまく米と商いをしたいものだ」という言葉を伝えている（『津軽一統志』）。高岡が弘前と改称されたのは1628（寛永5）年のことなので、これは松前藩成立から間もない時期の状況を伝えているようだ。すなわち、室町時代から江戸時代初期にかけて石狩川流域のアイヌは、津軽海峡を自由に往来し、十三湊や高岡を訪れて、和人との交易に従事していたと考えられる。

さらに広い視野に立つと、石狩川流域はのちに「サンタン交易」として知られるアムール地域ーカラフトー蝦夷島を結ぶ交易ルートの一部を構成する地域だったことがうかがえる。

*1 アイヌの統率者シャクシャインの呼びかけによって、アイヌ民族の大勢力が中心となって、松前藩・和人のつくってきた秩序（和人優位の交易や和人漁業の始まりなど）を変えようとした戦い。シャクシャインが謀殺されたことで終わった

チョマカウタの商場

江戸時代に蝦夷地を支配した松前藩は、アイヌ集団との交易の場として各地に商場を設定した。『津軽一統志』は、石狩川下流域の商場について次のように伝えている。「河口より順風で2日上ると『ちよまかうた』というところがあり、多くのアイヌが住んでいる。ここまでは松前の船が上ってきて、方々からアイヌも交易のために集まってくる。また、『ちよまかうた』より川路を上ると2日でツイシカリというところに着く。これより先は水の流れが速いので、チョマカウタより上流へは船はのぼっていないという」。

他方、1727（享保12）年の『松前西東在郷并蝦夷地所附』には、「御船商いをしていたところである先年は、てうまうたというところまで航行していたとのことだ」とあるので、チョマカウタというのは藩主手船の商場が設定されていた地と考えられる。

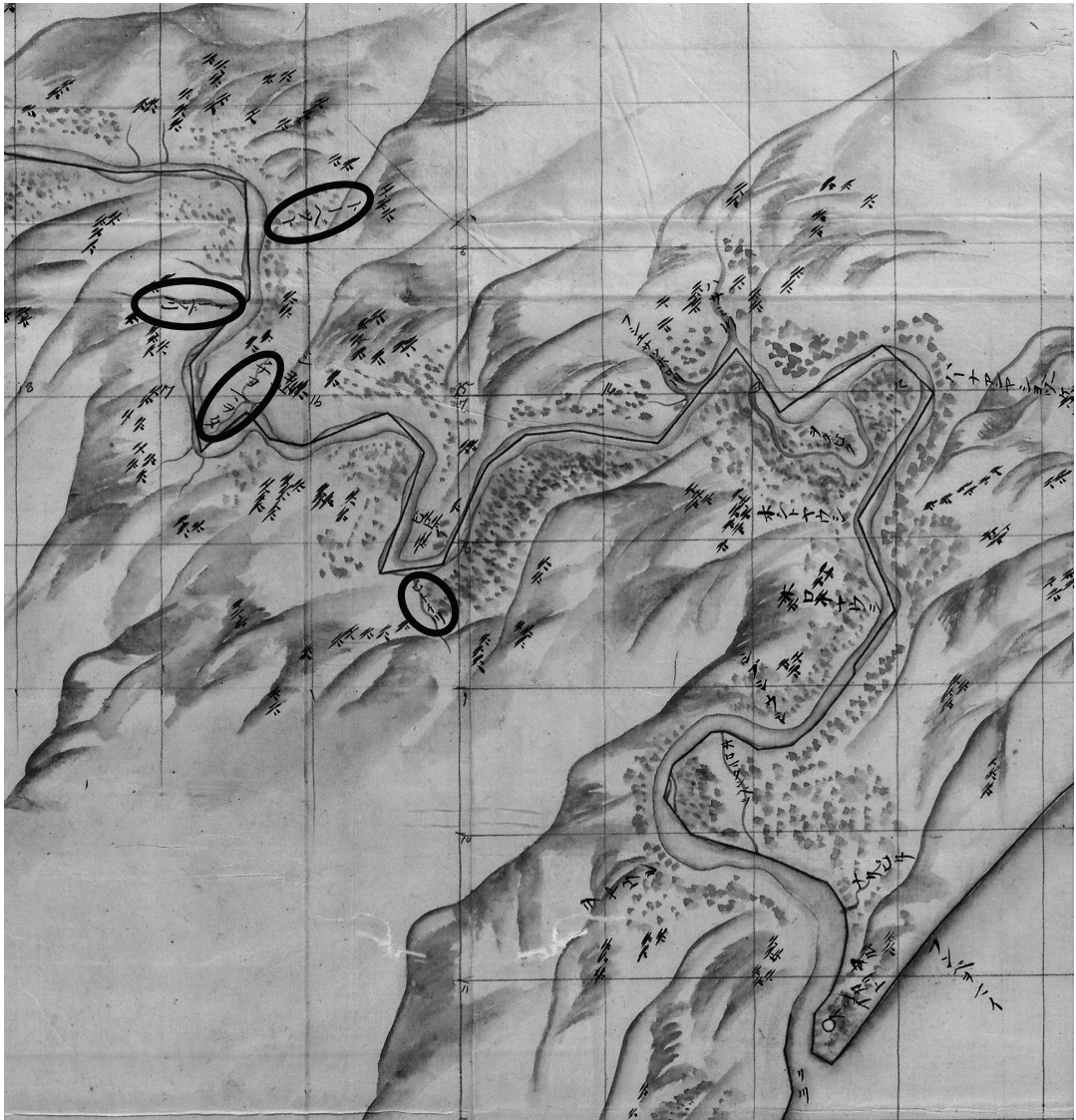
このチョマカウタという地名は、アイヌ語でci-o-maka-ota「我々が - そこを - （碇泊所として切り） - 開いた - 砂浜」と解することができる。チョマカウタの所在についての情報は限られているものの、19世紀に作成された伊能忠敬の「大日本沿海輿地全図」を見ると、石狩川の右岸に注ぐ「ビトイ川」と「トーベツ川」の間の対岸に「チョマヲタ」という地名が見られる（次頁図1、アメリカ議会図書館蔵「伊能大図」〈国土地理院「古地図コレクション」〉）。時代的にだいぶ下る記録であり、石狩川の流れもたびたび変わっていることに注意を要するものの、これを現在の当別町付近であると考えられる。

すなわち17世紀の当別付近は、松前藩主の手船が渡来し、アイヌたちとの活発な交易が行われていた、石狩川流域のなかでも特に重要な場所だったと考えられる。

快風丸が伝えた石狩川流域

1688（元禄元）年、徳川御三家のひとつである水戸藩は、快風丸という船を建造して石狩川河口の調査に派遣した。藩主の徳川光圀が蝦夷地への航行を目的として7000両余もの巨費をかけて建造した、全長27間（約49.1m）もの大船である。快風丸は、完成後の1686（貞享3）年、1687（貞享4）年、1688年と3度にわたって蝦夷地への航海に出たことが知られているが、詳細な記録が伝わっているのは3度目の航海のみで

図1 伊能忠敬が描いた石狩川流域の地図



資料：From the collections of the Geography and Map Division, Library of Congress, Washington, D.C., U.S.A. 国土地理院所有「伊能大図（米国）図版データ」を加工し、「チヨマヲタ」の周辺を拡大した。近辺には「トーベツ川」「トーベツト」「ビトイ川」（○で囲んだ）などの文字も読める。

ある。

水戸藩士たちがイシカリに到着したのはこの年の6月26、27日ころで、それから40日ほど滞在し、8月6、7日ころに帰路についている。この間、石狩川流域を見分し、アイヌの生活にも触れて多くの情報を得ている。例えば、石狩川の広さは、水戸藩領の那珂川より広く深い。川の脇にはアイヌたちが居住しており、両脇は平野になっていて、4、5里ほど先に

大きな山が見える。平野は木立が繁っている、往来には舟を用いている、などなど。河口から3日ほど遡行したというので、当別付近まで足を延ばしたと考えられる。

快風丸は、石狩川の歴史を語る上で非常に重要な記録を残している。それは、石狩川について鮭の豊富な地と言及している点である。例えば、「鮭については、石狩川に初秋より上ることおびただしい。棒にて打殺し、あるいは色々な手段で捕獲する」、「鮭が上る際にはなかなか多く、舟の艫に当たるほどだ」といった具合である。また、「生鮭100本を米1斗2升と交換している。そのほか、酒5升にも煙草1斤にも換えている」と、松前藩が決めた交易の際の交換比率を伝えている（「快風丸記事」北海道大学附属図書館蔵）。快風丸の一行も、生鮭を買い集め、塩引きに加工して1万本もの量を積み帰ったという。

飛騨屋久兵衛のイシカリ山請負

松前藩は、やがてアイヌ交易を商人に委任するようになっていったため、藩の助力を得て蝦夷地に進出する「冒険商人」ともいべき者たちが現れた。そうした商人の一人に、飛騨屋久兵衛がいる。飛騨国から江戸へ出て材木商として頭角を現した初代飛騨屋は、1702（元禄15）年以降蝦夷島に渡り、松前藩から蝦夷山請負人の地位を得た。以後、飛騨屋は各地の林業を請け負い、次々に伐採を進め、これを江戸や大坂に送って売りさばいたのである。

3代目飛騨屋は、1752（宝暦2）年、はじめて「イシカリ山」（石狩川流域の山）に杣夫を送り込んだ。その事業のありさまをよく伝えるのが、「飛騨屋久兵衛石狩山伐木図」（北海道大学附属図書館蔵）である。この図には、石狩川中流域から伐り出した材木を川の流れを利用して運ぶルートが描かれているのだが、そのなかで「トウ別川口」（当別川が石狩川に合流する地点）のあたりに「此所イカダ繫場所」の書き込みが見られる。伐り出した材木を組んでイカダにし、川の流れに任せて下す際に、当別町域のあたりを係留地点にしていたのだろう。後述するとおり、当別町域周辺は漁業基地・舟運の中継基地（昼休所）として記録に現れることが多いが、すでにこのころそうした役割を有していた可能性がある。

なお、こののち4代目に代替わりした飛騨屋は、材木商からアイヌ交

*2 クナシリ島とメナシ地方のアイヌ民族が蜂起し、クナシリ、キイタツ、アッケシ場所などを請け負っていた飛騨屋の関係者や松前藩の役人などを殺害する事件が発生した。飛騨屋による酷使や虐待を含め労働条件に強い不満があったことが蜂起の原因とされる。首謀者37名は処刑され、飛騨屋による場所の請負は1790（寛政2）年に取りやめとなった

易の場所を経営する場所請負人へと転身する。しかし、交易相手だったはずのアイヌたちを漁業労働者として扱い、その反感を買ってしまった。その結果、飛騨屋はクナシリ・メナシの戦い^{*2}（1789年）を惹起してしまい、責任を取って郷里飛騨へと逼塞^{ひっそく}を余儀なくされるのである。

幕府調査団が見た「ヒトイ」

1798（寛政10）年、目付渡辺久蔵胤・大河内善兵衛政寿以下、総勢180余名もの大規模な幕府の蝦夷地調査団が派遣された。西蝦夷地の調査を担当したのは勘定吟味役三橋藤右衛門ら27名であり、一行の武藤勘蔵がイシカリの繁栄ぶりを『蝦夷日記』に次のように記している。「当所は西蝦夷地で最も繁盛している地であり、諸国の船が停泊している。（中略）支配人・番人からアイヌに至るまで、他の場所よりも着衣などが上等な方である」。

1805（文化2）年から翌年にかけては、目付遠山金四郎景晋、勘定吟味役村垣左太夫定行による西蝦夷地調査が行われた。この調査の記録のひとつ『遠山村垣西蝦夷日誌』には、「ヒトイにはアイヌの家が3軒ある、ここは鮭の漁場である」という記事が見られる。ヒトイは当別付近のビトイに当たると見られるが、これが出稼小屋でなく住居を指しているならば、現時点では当別付近における最初の住人に関する記録である。この地が鮭漁の拠点であったことも、この記事から判明する。

また、この調査に遠山の手付として随行したのが、最上徳内であった。『東海参譚』^{とうかいさんたん}には、著者の東寧元稔が最上徳内に贈った詩文が収載されており、そこには「早発石狩河、沂河水、最子員中流相別、至当別、付帰舟以贈」と添えられている。この記事から察するに、徳内は一行と別れてトウベツなど、石狩平野の奥深くまでも探検したと思われる。

こうした実地調査を踏まえて、1807（文化4）年、幕府は松前藩から蝦夷地を取り上げ、直轄支配下に置いた（第一次幕領期）。

石狩川下流域のアイヌ人口

イシカリ十三場所^{*3}のアイヌ人口は、史料によれば1792（寛政4）年の時点で657人、1807（文化4）年に2285人、1810（文化7）年に3067人を記録している。ここからは、第一次幕領期に入るとともに、総人口が急速に増大しており、特に河口近くで顕著な増加を示していることがう

*3 イシカリ十三場所は石狩川および支流に設置された「場所」（交易を行う範囲）の総称で、単に「イシカリ場所」と表記されることもある

かがえる。

人口の増加をもたらした一因として、鯨漁・秋味漁への労働力の集約が挙げられる。たとえば、1807年の近藤重蔵の書付に、「他の場所のアイヌが飢えるなどした時には、イシカリへ来てそのまま永住する者もいる。また秋味漁から引き続き永住する者もいる」とある通り、他場所から飢餓のため永住する例、また秋味漁のため永住する例などがあったようだ。こうした移住者により人口の爆発的増加、河口部への集住が生じたものと考えられる。

人口の集中は同時に感染症の流行をもたらした。イシカリ場所では、1817（文化14）年2月から疱瘡が流行しはじめ、翌年4月中までに、2137人のうち833人が死亡するという大惨事となった。疱瘡により多くの労働力が失われたことで、ただちに影響が及んだのが秋味漁である。例年は800人ほどの男女が集まって、110余統の網を使って漁をするのだが、翌年は30統くらいの漁しか見込みがなく、例年の4分の1程度の漁獲量しか望めない、という状況であった。

「小さき運上屋の如」きビトイの地

1821（文政4）年、幕府は蝦夷地を松前藩に還付した。ところが、幕末にロシアとの間で領土問題が発生したため、再度直轄支配に着手した（第二次幕領期）。

第二次幕領期のイシカリは、十三場所の運上屋（元小屋）が所在する本拠で、蔵や出稼小屋など40棟余が建ち並び、勤番所・武器庫もあった。「夷人小屋」は165軒あり、人別は670人（男325人、女345人）を数えていた。漁獲の見込高8000石余、運上金は1000両の大場所で、漁期には出稼人も増加し、大船も多数繰り込んでいた。

石狩川下流域に和人やアイヌの漁場労働者が動員された結果、河口の元小屋所在地からツイシカリフト^{*4}付近に至るまで、場所請負人の諸施設が集中することとなった。その結果、ビトイとトウベツにも、賑わいが見られるようになる。

^{*4} ツイシカリフトは旧豊平川が石狩川に合流する地点

1824（文政7）年の記録である上原熊次郎『蝦夷地名考』は「ピトキ休所あり」とあって、ビトイに休所が設けられてあったことを伝えている。

トウベツについては、1846（弘化3）年に蝦夷地を踏査した松浦武四

郎の記録『再航蝦夷日誌』において、川上に沼があること、アイヌが漁をする仮小屋が設けられていること、石狩川の川幅は120間ほどであり、両岸に柳や桑が多いという旨が記されている。また武四郎は同書で、ビトイを次のように描写している。

*5 サル場所は平取町、日高町の沿岸部や川筋に置かれた場所

*6 ユウフツ場所は苫小牧沿岸部や千歳川沿岸などに置かれた場所

「番屋がある。アイヌの小屋があるが、みな出稼者のためのものだそう。また、サル^{*5}・ユウフツ^{*6}の両場所からもここへ出稼ぎに来ること、その番屋もある。上陸して昼食をとる。また川向うにも支流がある。(中略)かたわらに蔵がある。弁天社などもあって、小さな運上屋のようである」

ビトイの付近は、場所経営の中心地である運上屋所在地に例えられるほどの施設の充実ぶりだったと伝えているのである。事実、やや後年の1855(安政2)年の記録によれば、ビトイには「御屋所」が1棟のほか、「秋味居小家」1棟、「茅蔵」2棟、「蝦夷雇小家」1棟の計5棟が建ち並んでいたという。ここからも、漁期には出稼ぎのアイヌたちが多く来訪し、にぎわいを見せていた様子が想像される。もっとも、この時点では住人は確認できず、漁期をのぞけば人気のないさびしい場所だったことだろう。

幕末の石狩川下流域

1856(安政3)年にイシカリを訪れた佐倉藩士窪田官兵衛は、「この地、蝦夷地にあつては一都会であるとのことだ。アイヌの言に「松前を見なければイシカリを見よ」というたとえまでであるという」と伝え(『協和私役』)、また翌年にイシカリを訪れた関宿藩士成石修輔も「諸方から和人・アイヌとも群集して、大船も30あるいは40艘も入津しており、ひとしお賑わっている」と、漁期の賑わいぶりを伝えている(『東徼私筆』)。

当別付近については、変わらず出稼ぎの小屋が建っているだけだったようだ。窪田は河岸のビトイについて「漁舎あり。常住の人なし」(『協和私役』)と伝えるに過ぎない。出稼ぎのアイヌが漁期に用いる小屋はあるものの、この時点ではまだ住人もなかったようだ。

しかし、こうした状況はイシカリ改革(場所請負が廃止され、代わって設置されたイシカリ役所が場所の直掬を行うことなど)の進展によって大きく変わっていくことになる。

イシカリ改革の結果として設置されたビトイ番所は、次のようなもの

であった。1859（安政6）年8月の漁業者の掟（秋味掟）によると、漁業者が川を上る際には、「御役所」（ここではイシカリ役所ではなく、その支配下で漁業を専管した改役所のことであろう）にて切手を発行してもらい、マクンベツ・ビトイ・ツイシカリの番所でそれぞれ船改めを受けて切手の書き替えを行う体制がとられていた（「五十嵐勝右衛門文書」のうち「漁業者の掟」『新札幌市史』第6巻）。ビトイを境に上流域と下流域で役鮭（鮭の漁獲高にかかる税）の負担額が別に設定されていることから、ここは石狩川の漁業を管理する上で重要な地点と認識されていたことが分かる。

水戸藩領民の蝦夷地進出

イシカリ改革の大きなねらいは、場所の閉鎖性を打破し、出稼人（鮭網経営主としての出稼人、以下『新札幌市史』にならい、一般の出稼永住者と区別して網持出稼人と呼ぶ）を受け入れ、生産活動を高めることにあった。そこで、新漁場の開発を望む者へは逐次割渡しを行った。

当別周辺においても、網持出稼人への漁場の割渡しが行われている。1859（安政6）年の例を見ると、ビトイには阿部屋伝次郎（松前出身）・山田文右衛門（松前出身）・三国屋金四郎（越後出身）・平治（イワナイ出身）・六郎兵衛（尾張出身）、トウベツブトには五十嵐勝右衛門（常陸出身）が漁場を得、それぞれに漁獲高をあげている。

幕末期の当別には、水戸藩領民も進出した。幕府の許可を得て、水戸藩は蝦夷地への出漁を願い出ていた領内大津浜の漁業者五十嵐勝右衛門らを、石狩川河口地域に進出させることに成功したのである。箱館奉行としてもちょうどイシカリ改革に着手する段であったので、勝右衛門を新規の網持出稼人として鮭漁場を割り当てた。あわせて、石狩川筋エベツより上流域すべての開発とルルモッペ（留萌）方面への新道調査を命じて、その広大な土地の経営を任せ、さらに漁場や出稼人の世話に当たる浜名主・湊案内という役にまで任じたのである。勝右衛門がこのような権力を与えられたのには、彼が後援者である水戸藩の名を有効に活用したためと考えられる。

勝右衛門は1858（安政5）年、イシカリ役所から浜中（河口の西）と川筋5カ所（ビトイからツイシカリの間）を割り渡され、七統の引網を許された。藩としても、勝右衛門らの活動をさまざまなかたちで支援し

たことだろう。この年、水戸藩士生田目弥之介が現地視察に当たっており、トウベツブトにおいて同藩出身の漁民たちが漁小屋を建て、川ざらいをするなどして、明年の漁に備えている、と伝えている。しかし、慣れない鮭網経営は困難だったようで、出稼5年目の1862（文久2）年、勝右衛門が直接経営した引場はトウベツブトの二統のみで、その水揚げは524束（約175石）にすぎない。この年の漁が終わると勝右衛門らは、経営から手を引き、網持出稼人の座を降りたのである。

石狩川下流域における「村」の形成

幕末期には石狩川下流域に商工業者が移住し、集落が形成されつつあった。同時にイシカリ役所による開拓事業の結果、「村」も次々に生まれていた。たとえば、イシカリ役所詰の調役並荒井金助が1860（万延元）年ころ農民を入植させてシノロに開いた荒井村である。また、在住（農民を連れて入植した幕臣の移住者）の開拓事業によって生まれた村もあった。

他方、これらとは異なるルーツを持つ村もあった。1866（慶応2）年以降、箱館奉行の直轄農場としてイシカリ御手作場が設けられ（現・札幌市東区南西部）、大友亀太郎が中心となって開拓を担った。1834（天保5）年、相模国足柄下郡の農家に生まれた大友は、二宮尊徳のもとで農村復興策である報徳仕法を学び、その後箱館に渡って木古内村・大野村の開墾に従事した。その後、在住となった大友は蝦夷地開墾掛に任じられてイシカリの原野に赴任、サッポロを本拠地に定めて開墾に着手し、御手作場の経営に当たった。このイシカリ御手作場から興ったのがサッポロ村である。同村は1868年の時点で95人を数え、翌1869（明治2）年にも4戸11人が入植している。

これら幕府役人・在住の開拓によって形成された「村」は、村役人が任命されるなど、かたちの上では近世郷村と同様の形態だった。ただし、領主による検地、年貢・賦役の負担といった近世一般の村の要件を満たしているとはいいがたく、「村」というのもあくまで便宜的な呼称だったようである。

以上に見たような積極的な開墾政策が周囲で進められていくなか、これまで住人のいなかった「当別」に対して開拓の期待が集まることになる。次章に見るとおり、大友亀太郎が1868（慶応4）年に当別の開墾を

志し、その後は兵部省の計画もあったが、その事業は1870（明治3）年に中止された。

その翌年となる1871（明治4）年5月、すでにシップに移住を始めていた伊達邦直を主君とする岩出山伊達家は、当別拝借の許可を受けた。これが当別の近代の始まりであった。

コラム 広田八十五郎と「めしたき」ハチャ

ビトイの番所に赴任した人物として、1858（安政5）年8月の時点では同心の広田八十五郎・有田精治郎が、秋味漁に備えて駐在していたとの記録がある。広田は1857（安政4）年の時点で、「めしたき」としてハチャという12歳の少年を雇用していた。ハチャは、トクヒタ（石狩川下流域だが、正確な位置は不明）の小使（役蝦夷の一種）に任じられていたハセアという人物の息子だという（『イシカリ場所人別帳』『新札幌市史』第6巻・史料編1）。「めしたき」というのは、文字どおり食事の用意をするなど広田の身の回りの世話をしていたものと思われ、広田との間で日本語でのコミュニケーションも可能だったと思われる。

ハチャはのちに石川八之助と名を改め、1872（明治5）年の時点では東京の開拓使仮学校で農業を学んでいることが確認できる（写真1、廣瀬健一郎「開拓使仮学校附属北海道土人教育所と開拓使官園へのアイヌの強制就学に関する研究」『北海道大学教育学部紀要』第72号）。

広田がビトイに駐在する際にハチャを伴っていたかどうかは明らかでない。とはいえ、幕府の蝦夷地支配は広田のように松前藩復領期以来の経験を有した能吏と、ハチャのように日本語を身に付け和人とアイヌの間に立った境界人が存在することで、初めて可能になった点を見逃してはならないだろう。



写真1 「開拓使東京第3号園留学アイヌ人 其1」（北海道大学附属図書館所蔵、石川八之助の氏名を記入した）

<引用・参考文献>

- 秋月俊幸『日本北辺の探検と地図の歴史』（北海道大学出版会、1999年）
- 荒野泰典編『日本の時代史』14 江戸幕府と東アジア（吉川弘文館、2003年）
- 君尹彦「ちよまかうた論」上（『札幌の歴史』第21号、1991年）
- 札幌市教育委員会編『新札幌市史』第1巻 通史1（札幌市、1989年）
- 札幌市教育委員会編『新札幌市史』第6巻 史料1（札幌市、1987年）
- 関口明・桑原真人・瀧澤正・田端宏編『アイヌ民族の歴史』（山川出版社、2015年）
- 長沼孝・越田賢一郎・榎森進・田端宏・池田貴夫・三浦泰之『新版北海道の歴史』
上 古代・中世・近世編（北海道新聞社、2011年）
- 平山裕人『シャクシャインの戦い』（寿郎社、2016年）
- 北海道庁編・発行『新撰北海道史』第5巻・史料1（1937年）
- 村井章介『境界史の構想』（敬文舎、2014年）
- 国土地理院「古地図コレクション」のうち、米国議会図書館所蔵「伊能大図」18〔江別〕
- 井口利夫「石狩川沿いのアイヌ地名」(4)ピトイ・美登位（『いしかり暦』第31号、
2018年）
- 榎森進『アイヌ民族の歴史』（草風館、2007年）
- 片上広子「近世における石狩地域の動態 —松浦武四郎日誌を中心に—」（『人文地理』第45巻第6号、1993年）
- 君尹彦「石狩改革」永井秀夫編『近代日本と北海道 —「開拓」をめぐる虚像と実像—』（河出書房新社、1998年）
- 君尹彦「石狩の近代化はどのようにして進められたか」正・続（『いしかり暦』第
12・13号、1999年・2000年）
- 高倉新一郎『日本庶民生活史料集成』第4巻 探検・紀行・地誌（北辺篇）（三一書房、
1969年）
- 濱口裕介「幕末期における蝦夷地開拓構想と築城論 —徳川斉昭『北方未来考』を
中心に—」（岩下哲典・「城下町と日本人の心」研究会編『城下町と日本人の心性
—その表象・思想・近代化—』（岩田書院、2016年）
- 麓慎一「安政五年の石狩改革」（『松前藩と松前』第31号、1989年）
- ブレット＝ウォーカー著／秋月俊幸訳『蝦夷地の征服1590-1800 —日本の領土拡張に
みる生態学と文化—』（北海道大学出版会、2007年）